

令和8年度

公立高等学校入学者選抜

学力検査結果活用ガイド

～学習内容の確実な定着に向けて～

山梨県教育委員会

目 次

I	調査の概要	-----	1
II	総合得点（全教科の合計点）の学力検査結果概要	-----	1
III	教科別学力検査結果及び抽出調査・分析の概要		
	国 語	-----	3
	社 会	-----	7
	数 学	-----	11
	理 科	-----	15
	英 語	-----	20

I 調査の概要

1 調査の目的

令和8年度山梨県公立高等学校入学者選抜のために実施した学力検査の成績結果の調査・分析をとおして、本県公立高等学校志願者の学力の実態を把握し、本県中学校及び高等学校の教科教育を充実させるための資料とすることを目的とする。

2 学力検査実施日、調査教科

令和8年3月4日（水）

国語（55分）	9：30～10：25
社会（45分）	10：45～11：30
数学（45分）	11：50～12：35
理科（45分）	13：35～14：20
英語（45分、うち「リスニング」約11分）	14：45～15：30

3 調査対象者

全日制公立高等学校入学者選抜検査の全教科（5教科）を受検した3,009人を対象としている。

なお、正答率調査については、上記受検者の中からの抽出者を対象とした。抽出人数は、301人で、全体に占める抽出者の割合はおよそ10%である。なお、対象者の抽出にあたってはすべての高等学校での受検者を対象に、その受検高等学校の受検者数に応じて、無作為に抽出した。

II 総合得点（全教科の合計点）の学力検査結果概要

1 出題のねらい、配慮事項

- ① 中学校学習指導要領に示されている各教科の目標及び内容に即して、基礎的・基本的な事項を重視するとともに、それらを活用する力を検査することができるように出題した。
- ② 当該教科の各分野、領域及び事項にわたって偏りのないように出題した。
- ③ 単に記憶の検査に偏らないように配慮し、思考力、判断力、表現力を検査することができるよう工夫した。
- ④ 全県的な視野にたって出題し、地域差による影響が生じないようにした。
- ⑤ 特定の教科書等の使用者が有利になることのないようにした。

2 総合得点及び教科別平均点、最高点、最低点（調査対象：3,009人）

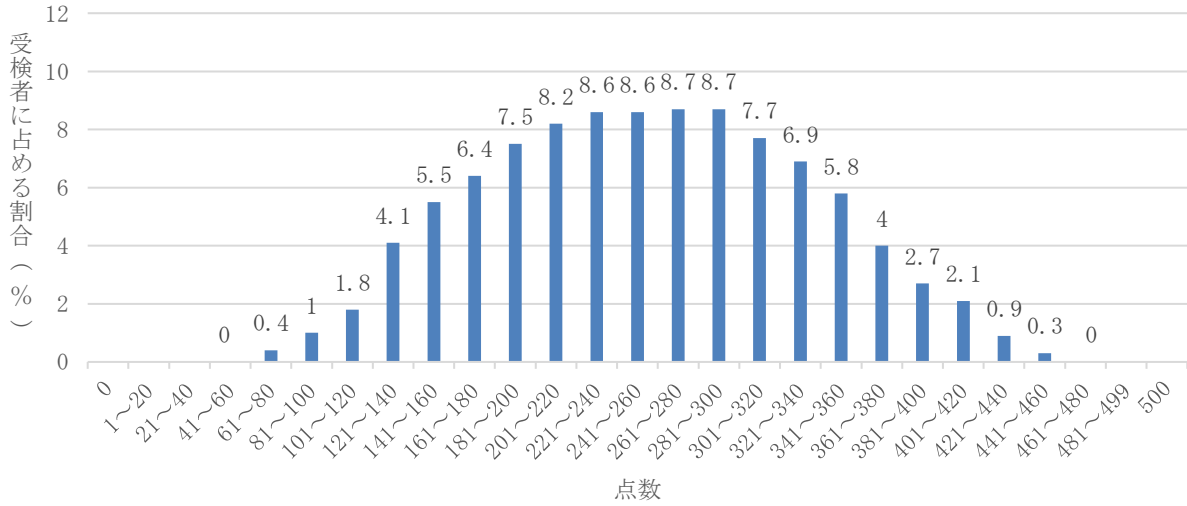
	総合得点	国語	社会	数学	理科	英語
平均点	255.9	53.8	52.9	53.8	55.6	40.0
最高点	461	90	98	98	100	100
最低点	52	4	7	3	8	3

3 総合得点の得点分布（調査対象：3,009人）

総合得点の平均点は255.9点で、前年度より10.7点下がった。得点分布は（図1-1）に示すとおりである。

*小数点第1位までを表示している。

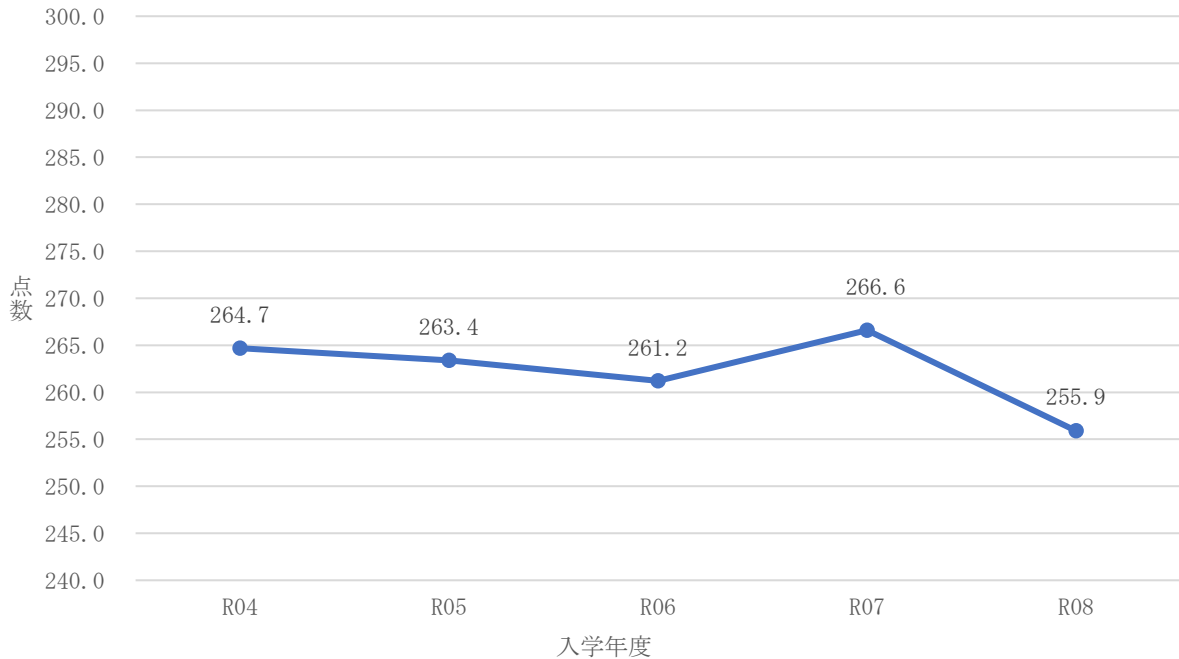
（図1-1）



4 総合得点の平均点の推移（調査対象：各年度の5教科受検者全員）

令和4年度から今年度入試まで5年間の全体平均は（図1-2）のように推移している。

（図1-2）



Ⅲ 教科別学力検査結果及び抽出調査・分析の概要

○ 国 語

1 出題のねらい、配慮事項

中学校学習指導要領の趣旨に基づき、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」における3領域（「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」）から偏りなく出題した。

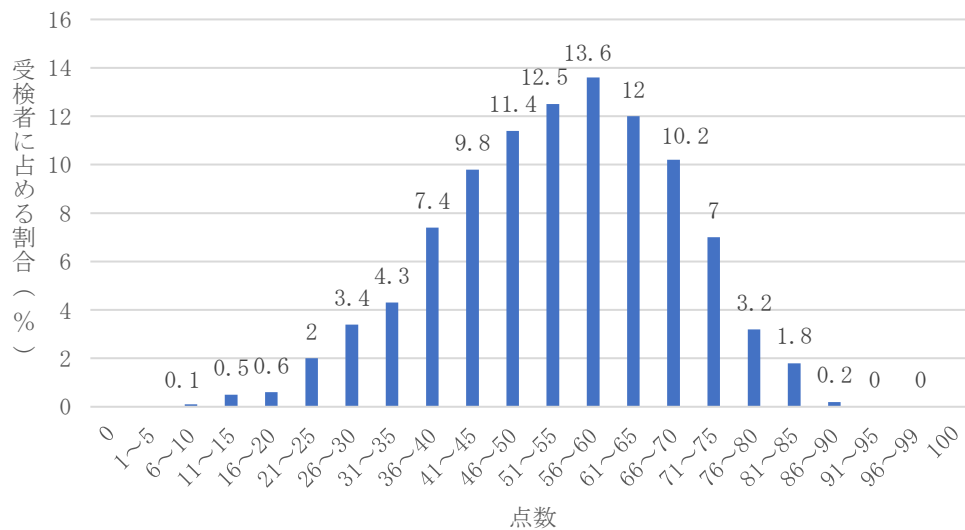
- ① 「話すこと・聞くこと」については、話し合いの場面を取り上げた。互いの立場を尊重しながら、進行の仕方を工夫し、合意形成に向けて話し合う力などを測る出題とした。
- ② 「書くこと」については、文学的な文章の内容に即したテーマについて、適切な材料を集め、自分の考えの変化が分かりやすく伝わるよう、構成や表現を工夫する力などを測る出題とした。
- ③ 説明的な文章については、脳科学をテーマとした文章を読み、文の対応関係を整理しながら中心的な部分と付加的な部分を捉え、内容の解釈へとつなげる力などを測る出題とした。
- ④ 古典については、様式の異なる二つの文章から、目的に応じて適切な情報を得たり情報を結びつけたりして、場面の状況を捉え、人物の言動の意味を考える力などを測る出題とした。
- ⑤ 文学的な文章については小説を取り上げ、語句の意味や表現に注意しながら、場面の展開や登場人物の相互関係を捉え、描写を基に登場人物の心情の変化について考える力などを測る出題とした。

2 教科別 平均点，最高点，最低点（調査対象：3,009人）

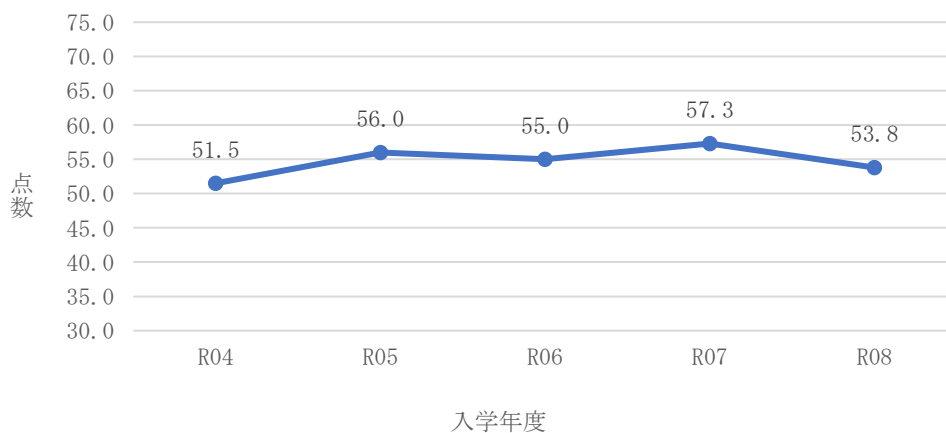
平均 53.8 点，最高点 90 点，最低点 4 点

3 国語の得点分布（調査対象：3,009人）

*小数点第1位までを表示している。



4 平均点の推移（調査対象：各年度の5教科受検者全員）



5 大問別の内容と抽出調査・分析

一 知識及び技能（漢字の読み書き・文の成分の順序に関する知識）

一、二では、これまでと同様に常用漢字の読みと書き取りについて出題した。学習指導要領で求められる漢字の知識は概ね身に付いているといえる結果であったが、一（ウ）「珠玉」、二（イ）「操縦」の正答率が60%を下回った。三では、学習指導要領の「言葉の特徴や使い方に関する事項」の中から、文の成分の順序や照応など文の構成に関する知識・技能を測る出題としたが、正答率が27.2%であった。学習した知識が生きたものとして働くよう、意識的・実践的に学びを展開する姿勢が求められる。

二 話すこと・聞くこと

学校行事の開催にあたり必要となる準備について、生徒会役員が話し合う場面を想定した。他者の意見を尊重しつつ、結論を導くために考えをまとめることができるかを測った二では、正答率が59.5%であった。議論の方向性や結論への道筋を確認しながら話し合いを進める学習機会を継続して持つことで、資質・能力の定着を図りたい。また、三については正答率が26.6%と低く、進行の仕方を工夫し、合意形成に向けて話し合う資質・能力の定着に課題が見られた。

三 説明的文章 出典『数学する身体』（新潮社）森田真生

なじみのない言葉が散見されるために読みにくさを感じる部分もあったかもしれないが、他の設問と比べて解答状況に差異はなかった。一の正答率は93.7%ときわめて良好であり、基本的な知識・技能の定着がうかがえる。一方で、二C、二Dおよび五の正答率が40%台であったことから、文章の中心的な部分と付加的な部分について叙述を基に捉え、要旨を把握する力や、文章の構成や論理の展開を把握する力については、一層の定着が求められる。三については正答率が11%であった。文章全体を見渡ししながら、目的に応じて必要な情報に着目し、内容の解釈へとつなげていく力の育成に引き続き取り組んでいく必要がある。

四 古典（古文） 出典

【文章Ⅰ】『おくのほそ道』（『新編 日本古典文学全集7 1 松尾芭蕉集②』小学館）

井本農一・村松友次・久富哲雄・堀切 実 校注

【文章Ⅱ】『奥細道菅菰抄』（『奥の細道古註集成2』笠間書院）西村真砂子・久富哲雄 編集
松尾芭蕉『おくのほそ道』より「象潟」の前半部を本文Ⅰとした。また、本文Ⅱは、同書の注釈書より、本文Ⅰ中のいくつかの言葉について解説する部分を用いた。一及び二は、音読に必要な文語のきまりや訓読の仕方に関する事項を出題したが、両方ともに90%を超える正答率であった。三C、四については、正答率がともに2%台と低く、四は無答率も4割近くあったことから、現代語訳を手掛かりに、目的に応じて複数の情報を整理しながら内容を解釈したり、登場人物の言動の意味を考えたりする資質・能力の育成が肝要である。

五 文学的文章 出典『藍を継ぐ海』（新潮社）伊与原 新

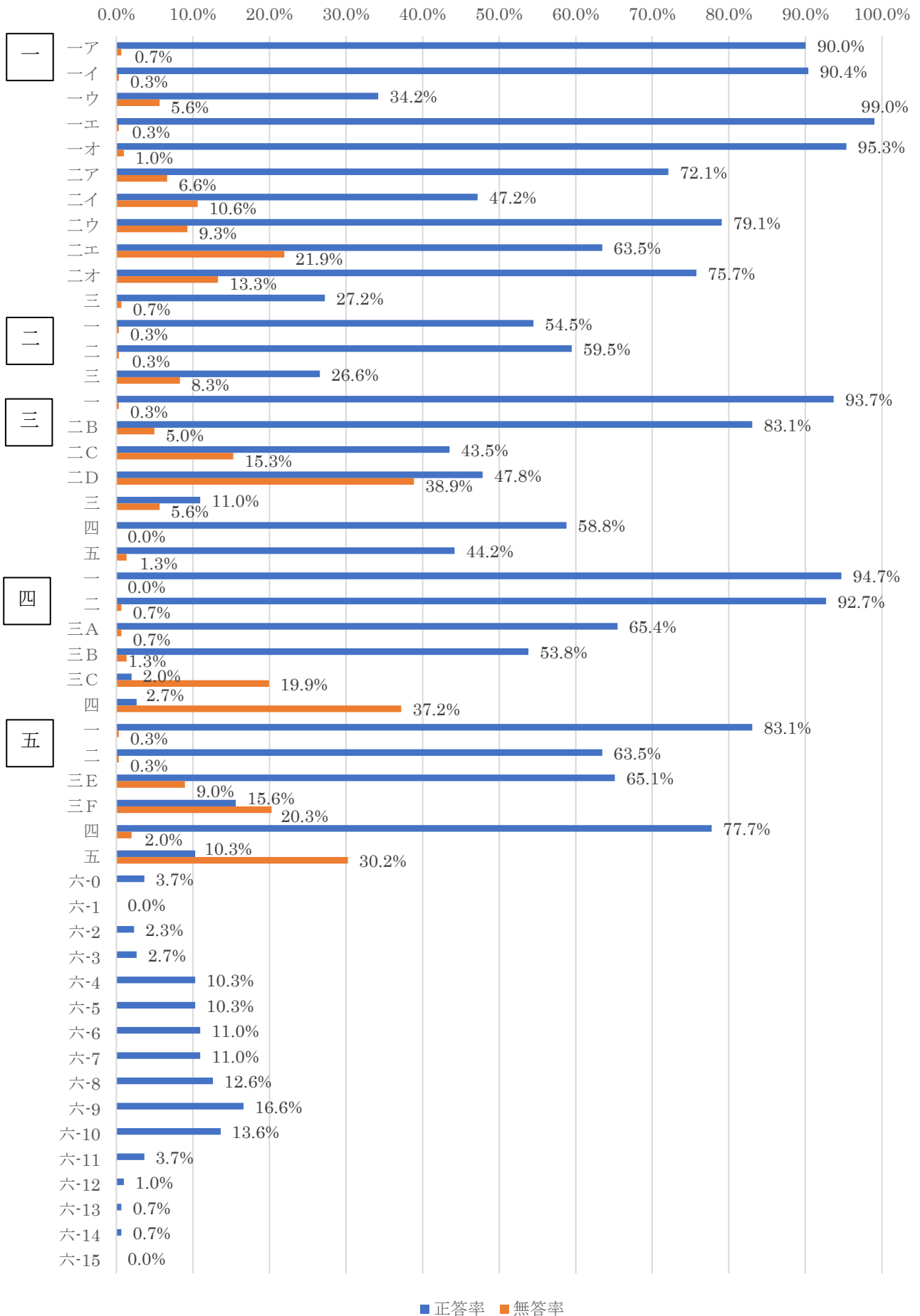
中学生の主人公の揺れ動く心を、周囲の自然や人々との交流の中に描き出す作品を本文とした。正答率が低かったものとしては、三Fの15.6%、及び五の10.3%が挙げられる。三Fでは、登場人物の言動の意味について考え、内容を解釈する力を、五では、文章の表現の仕方について評価する力を問うている。特に五は、表現の効果について考え、自身が文章を書く際に役立てられるような、日頃の取り組みが望まれる。

6 指導の改善の視点

思考力・判断力・表現力を働かせて解答する問題の中でも、特に記述式の問題について正答率の低さが目立った。思考力・判断力・表現力の育成の課程において、生徒が自身の考えを適切な表現を用いて伝えられるよう、言語活動などによる継続した取り組みが必要である。

また、国語科で育成を目指す資質・能力については、単元の計画を立てる際にその都度確認すること、単元を通して生徒が目標を達成できるよう計画し実施すること、目標とした資質・能力が実際に身に付けられたかを評価し、計画の振り返りを行うこと、などを不断のサイクルとして、着実な学びの実現を図っていききたい。

7 令和8年度 正答率調査結果（国語）（調査対象：301人）



三 三

正答率 11.0% 誤答率 52.5% 無答率 5.6%

本文では、脳の中で様々な情報がからみ合うことが複数の具体例によって詳解されている。

本問における傍線部では、数と数字の関係について説明がなされている一方、この文の後方では、数と位置の関係、数と時間の関係など、混ざり合い、からみ合いながら脳内で処理される情報の例が複数示される。

解答に当たっては、文章全体と部分との関係に注意しながら、同時に主張と例示との関係を捉えられること、さらには情報と情報との関係について把握できること、などがポイントとなる。解答には、複数の例を混同して記述するなど、具体例の正確な捉えに課題が見受けられるものが目立った。

文章全体を俯瞰しながら、全体における段落や具体例の持つ意味について、「読むこと」の指導を通して身に付けていくことが求められる。

【本文の一部】（ルビ、注釈等を省いている）
たとえば²二つの数字の大小を比較するときに、「2と5」と書かれるよりも「2と5」と書かれた方が、反応速度が遅くなったり、間違いやすくなったりする。また、画面に次々と数を表示しながら、その数が「65より大きい小さいか」を判定するような単純なテストでも、「大きい」と答えるボタンを右手に持つ方が、左手に持つよりも、一般に成績がよくなる傾向があるという。数量の大きさと位置の情報が脳の中で「混同」され、大きな数字ほど右の方に位置しているはずだと早合点されてしまうのである。

【問い】

三 二つの数字の大小を比較するときに、「2と5」と書かれるよりも「2と5」と書かれた方が、反応速度が遅くなったり、間違いやすくなったりする。とあるが、それはなぜか。「大きさ」という言葉を用いて二十字以上、三十文字以内で書きなさい。

四 四

正答率 2.7% 誤答率 33.6% 無答率 37.2%

【問い】 および【本文】から読み取れる情報として、芭蕉が西行法師の詠んだ和歌を知っていたこと①、歌に詠まれた桜を見たこと②、また、能因法師が過ごした旧居を訪れたこと③などが挙げられる。歌人にまつわるエピソードとして点在するこれら①から③の情報を、必要に応じて結びつけ、登場人物の言動の意味を考え、古典に表れたものの見方や考え方の理解につなげたい。

国語科の学習を通して身につける資質・能力が、様々な種類の文章読解の場面で発揮され、汎用的かつ実際的な能力として活用できるよう、3年間を見通した学習計画の設計とその実現を、日頃から意識して行うことが肝要である。また、生徒の日常生活における実感や感慨を文学作品と結びつけたり、学びによって獲得した資質・能力を、言語活動などを通して使う場面を設定したりすることなども、必要だろう。

【本文の一部】（ルビ、注釈等を省いている）
【本文I】
其朝天よく晴れて、朝日はなやかにさし出る程に、きさがたに舟をうかぶ。先づ能因島に舟をよせて、三年幽居の跡をとぶらひ、むかふの岸に舟をあげれば、「花の上こぐ」とよまれし桜の老木、西行法師の記念をのこす。
【本文II】
花の上こぐとよまれし桜は、（中略）西行の歌に、
きさがたの桜は波にうづもれて花の上こぐ海人のつり舟

【問い】

四 次の【 】は「文章I」「文章II」からわがことについて説明したものである。【 】には、どのような言葉が入るか、二十五字以上、三十字以内の現文で書きなさい。
【文章I】にある「花の上こぐ」とは、「文章II」にある和歌のことである。これは西行法師という平安末期・鎌倉初期の歌人がよんだとされている。
芭蕉がきさがたの地で、【 】行動か、彼が昔の有名な歌人たちに思いを寄せ、歌人にゆかりのある場所を訪れたいと思っていたことが読み取れる。【 】

○ 社 会

1 出題のねらい，配慮事項

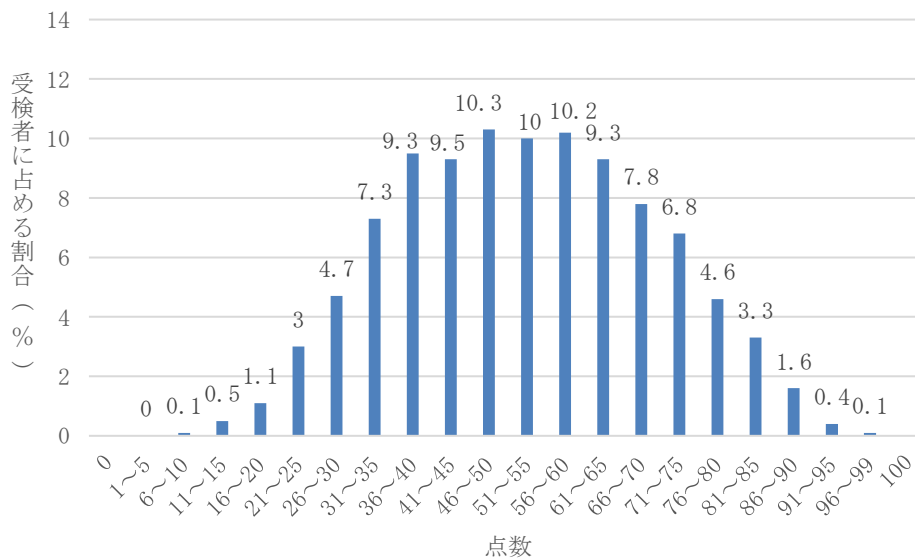
- ① 中学校における地理的分野，歴史的分野，公民的分野の三分野にわたって，基礎的・基本的な学力が定着しているか検査できるようにした。
- ② 地図，グラフ，表，写真などの諸資料を活用して，多面的・多角的に思考したり，判断したり，表現したりする力を検査できるようにした。
- ③ 中学校学習指導要領の趣旨に基づいた出題とするとともに，身近な地域である山梨に関する題材や時事的な事項に関する題材を取り入れるように配慮した。

2 教科別 平均点，最高点，最低点（調査対象：3,009人）

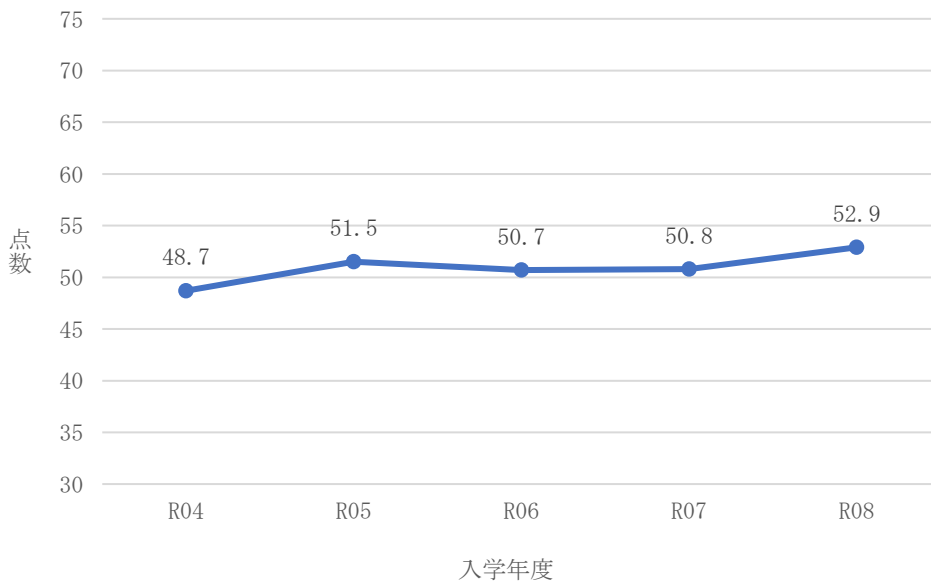
平均 52.9 点，最高点 98 点，最低点 7 点

3 社会の得点分布（調査対象：3,009人）

*小数点第1位までを表示している。



4 平均点の推移（調査対象：各年度の5教科受検者全員）



5 大問別の内容と抽出調査・分析

1 地理的分野

1の「世界の諸地域に関する」問題では、(3)の1993年に結成され、その後、東ヨーロッパ諸国に拡大した組織の名称を答える設問の正答率は50%を少し上回る程度であった。「ヨーロッパ連合」という語句は大部分の受検生が知っていると思われるが、それがヨーロッパ州という地域とその変容にどのような意味をもっているかという知識の理解の質に課題がみられる。

2の「地域区分、日本の諸地域、地域調査の手法、地域の在り方に関する」問題では、(2)岩手県と東京都における工業の業種構成とその変化を考察する設問の正答率は32.9%と低水準であった一方、(3)九州地方における卸売業と小売業、人口の統計から読み取れることを表現する設問では、完答正答率が60.8%と比較的良くできており、資料から読み取ったことを簡潔に表現する力が概ね身に付いていると考えられる。

2 歴史的分野

1の「歴史のとらえ方や調べ方」に関する問題では、(1)時代区分の意味の理解を問う設問の正答率は50%を下回った。歴史的分野の学習で身に付けるべき、歴史の学び方に関する概念の理解が不十分であると考えられる。

2の「古代から近世にかけての文学作品」に関連した問題では、(3)イエズス会が日本での布教活動に力を入れることになった背景を説明する設問の無答率は30%を上回った。歴史的事象が起こった背景を表現することに課題があると考えられる。

3の「日本や世界の歴史」に関する問題では、(2)の軽工業の発展の過程に関する知識を基に、できごとの流れを特定する設問の正答率は42.9%であった。歴史的な見方・考え方を働かせて、歴史的事象を考察する力が身に付いている受検生が比較的多かったと考えられる。

3 公民的分野

1の「私たちと現代社会」に関する問題では、(1)の政府の子育て支援のあり方についての異なる二つの主張の根拠となる考え方を選択する設問の正答率は50%に満たなかった。対立と合意の概念的な枠組みを用いて、社会的な事象を捉える力の定着に課題がみられる。

2の「私たちと政治」に関する問題では、(4)の議会制民主主義における異なる選挙制度の意義を考察する設問の正答率は59.5%と比較的良好であった。

3の「私たちと経済」に関する問題では、(1)契約についての概念の理解を問う設問の正答率はそれぞれ81.1%と87.7%と高水準であった一方、(2)の間接金融の具体例を選択する設問の正答率は41.5%と低水準であり、金融に関する基礎的な知識の理解の質に課題があると考えられる。

4 三分野総合

食料問題をテーマに、1では世界の食料問題の現状や背景を、2では我が国や本県の食料に関する動向や課題を、地理、歴史、公民の三分野での学習を基に、社会的な見方・考え方を働かせて考察・構想する問題を出題した。基礎的な内容を中心に出題し、一部、発展的な設問を取り入れた。

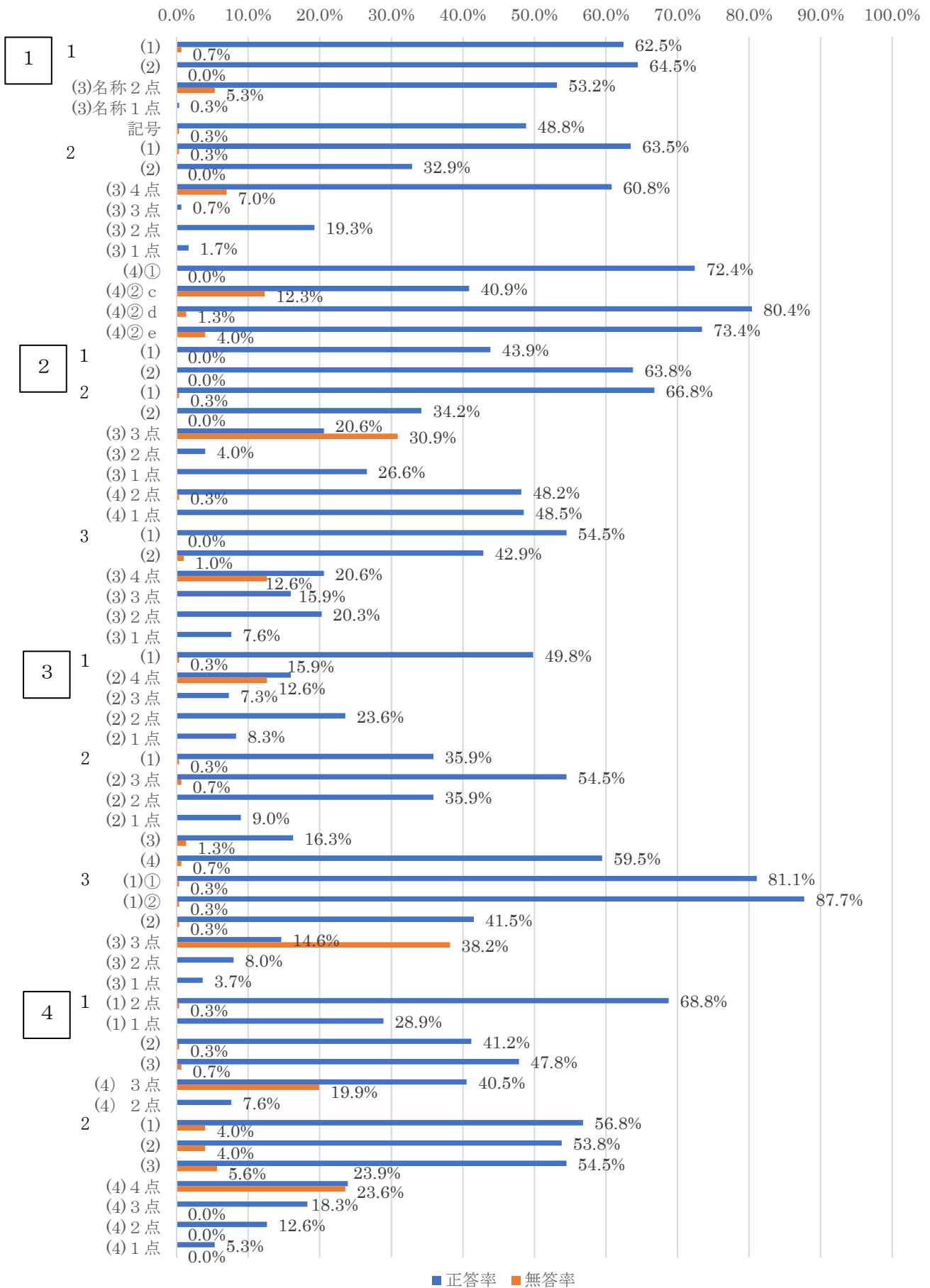
1(3)のアジア州と南アメリカ州の貿易の動向を考察する設問では、見慣れない資料の読み取りが求められたものの、正答率は47.8%であった。また、(4)の架空の国が特定の商品の生産に特化する経済的背景を、「分業と交換」に着目して概念的に考察する設問は、正答率が40.5%であった。これらの設問は発展的な出題であったが、3年間の社会科の学習を通して、社会的な見方・考え方を働かせて考察する力を身に付けることのできた受検生は、正答できたと考えられる。

5 指導の改善の視点

知識の理解の質の向上を図るために、10ページで例示しているように、それまでに学んだ知識を統合的に活用することが求められる学習活動を取り入れることで、深い学びを追究していくことが有効である。

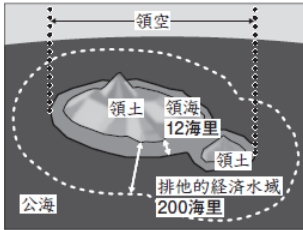
学習指導要領に示された、地理、歴史、公民の各分野の最後に配された中項目では、それまでに学んだ知識を統合的に活用しながら、学習課題を考察・構想する探究的な学習活動が想定されており、この中項目における学習活動の充実と、その中項目における学習活動を充実させるために生徒に必要な資質・能力を日々の授業実践のなかで体系的に育成していくことが、求められる授業改善の方向性である。

7 令和8年度 正答率調査結果（社会）（調査対象：301人）



3 2 (1) 正答率 35.9% 誤答率 63.8% 無答率 0.3%

(1) 次の資料は、ある国家の領土、領海、領空、排他的経済水域、公海を国連海洋法条約にもとづき模式的に示したものである。ある国家の主権がおよぶ範囲を、下のア～エから一つ選び、記号で書きなさい。



- ア 領土、領海
- イ 領土、領海、領空
- ウ 領土、領海、領空、排他的経済水域
- エ 領土、領海、領空、排他的経済水域、公海

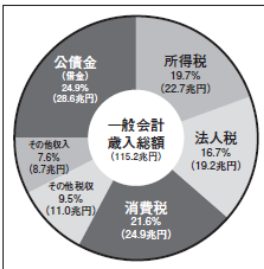
(一般社団法人国土技術研究センターウェブサイトより作成)

国家の主権がおよぶ範囲として適当なものを選択する設問である。本問題のポイントは、第一に、主権の概念を理解していることである。第二に、主権がおよぶ空間的範囲たる領域が、領土・領海・領空から構成されていることを理解していることである。つまり、この設問に正答するためには、国家について、概念的に理解している必要がある。

国家は、国際社会を構成する主体であり、国際政治で生起する事象の本質を理解するうえで、国家の概念的理解は前提になる。一方で、国家の概念は抽象的であるため、具体的な事象を教材として、課題を追究したり解決したりする活動の中で、生徒が国家の概念をつかめるような指導の工夫が必要である。

3 3 (3) 記述：正答率 14.6% (3点) 8.0% (2点) 3.7% (1点)
誤答率 35.5% 無答率 38.2%

(3) 次の資料は、日本のある年度の一般会計の歳入構成である。政府が所得税額を増やすために、法人税率を引き下げる政策を行った場合、一般的にどのような過程を経て所得税額が増えるだろうか、下の【条件】に従って簡潔に書きなさい。



(財務省ウェブサイトより作成)

【条件】

- ・文章の書き出しは、「法人税率を引き下げる政策により、」とする。
- ・「設備投資」、「給料」という二つの語句を使うこと。

○税の説明

- ・所得税：給料や商売の利益などに対して課せられる。
- ・法人税：法人の企業活動により得られる所得に対して課せられる。
- ・消費税：消費一般に対して広く公平に課せられる。

所得に対して課税される所得税額を増やすために、法人の企業活動による所得に対して課税される法人税の税率を引き下げることがどのように作用するかを考察する設問である。なお、本設問に限らず、【条件】は思考する視点や記述する方向性を示しているため、よく確認してから、解答に取りかかるようにしてほしい。

本設問のポイントは、第一に、所得税や法人税の性質を理解していることである。第二に、所得税の性質を踏まえ、人々の所得が増えると所得税額が増える構造を考察することである。第三に、人々の所得が増えることと、法人税率引き下げの関係を考察することである。

本設問に完答するためには、大項目「私たちと経済」における(1)、(2)の中項目で学んだ知識を統合的に活用しながら思考する必要がある。現実社会における経済活動では、(1)、(2)の中項目の内容に関わる事象が相互作用しており、大項目「私たちと経済」としてどのような資質・能力を身に付け、それをどのように見取ることができるかという視点が不可欠である。そこで、例えば、「私たちと経済」の終末に、「所得税率を変えずに、所得税額を増やすためには、どの税の税率を下げたらよいだろうか？」といった発展的な学習課題を設定し、それに取り組む生徒の姿を想定してから、(1)、(2)の中項目における具体的目標を体系的に設定することも考えられる。例示したような学習課題は、将来、生徒が主権者として直面する可能性のある現実的な課題であるため、生徒は学習課題に対して自分事として主体的に取り組むことができるだろう。このような学習活動を通して、生徒は学んだ知識の理解の質を高めると同時に、社会科の学習の意義を見いだすことができるなど、「平和で民主的な国家及び社会の形成者」に向けた深い学びを実現することができる。

○ 数 学

1 出題のねらい，配慮事項

数と式・図形・関数・データの活用の各領域にわたってバランス良く検査できるように，学習指導要領に基づき，次の点に配慮して出題した。

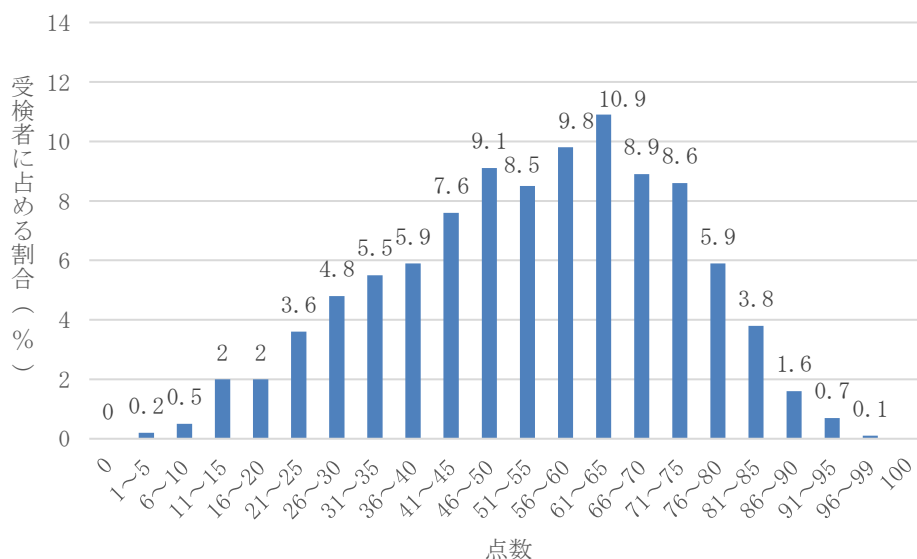
- ① 基礎的な概念や原理・法則などの理解や，事象を数学化したり，数学的に解釈したり，数学的に表現・処理したりする技能について検査できるようにした。
- ② 数学を活用して事象を論理的に考察する力について検査できるようにした。
- ③ 数量や図形などの性質を見だし統合的・発展的に考察する力について検査できるようにした。
- ④ 数学的な表現を用いて事象を簡潔・明瞭・的確に表現する力について検査できるようにした。

2 教科別 平均点，最高点，最低点（調査対象：3,009人）

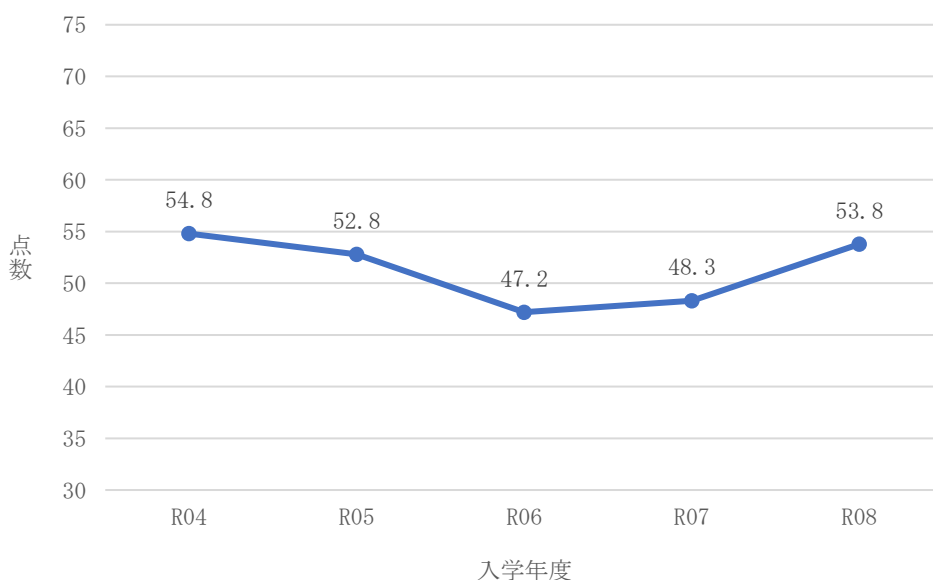
平均 53.8 点，最高点 98 点，最低点 3 点

3 数学の得点分布（調査対象：3,009人）

*小数点第1位までを表示している。



4 平均点の推移（調査対象：各年度の5教科受検者全員）



5 大問別の内容と抽出調査・分析

1 「数と式の計算」

基礎的・基本的な数式の処理ができるか検査する問題を出題した。正答率が高い問題は「正負の数の計算」と「根号を含む計算」で正答率は90%以上であった。すべての問題が正答率80%以上となり基本事項において定着が見られた。

2 「基礎的事項」

方程式の解、角の大きさ、作図、反比例、データの活用の理解の基本的な内容において数学的に表現・処理したりする力について検査する問題を出題した。中間4の選択問題は、反比例の特徴についての問題であったが、正答率は53.5%にとどまった。数学的な見方・考え方を働かせながら、知識及び技能を習得したり、習得した知識及び技能を活用して探究したりすることにより、生きて働く知識となり、技能の習熟・熟達につながる。そのことを踏まえ、指導に当たっては、数学的活動を一層充実させることが必要である。

3 「データの活用、数と式」

中間1(2)は、立方体の目の出方について考え、確率を求めさせる問題を出題したが、正答率は18.5%であった。問題を解決する過程において、2つの立方体の目の出方について、二次元の表などの数学的な表現を用いて、確率の求め方を考察する力をつけることが必要である。

中間2(2)の、根拠を示して説明する問題では、正答率は15.2%であった。条件や式を的確に捉え考察し表現することに課題が見られた。

4 「関数」

中間1(1)は関数の式と問題文から、1日あたりの消費量を求める問題を出題した。正答率は64%であった。多くの生徒が消費量を求めることができたが、3割以上の生徒が誤答をしていることを踏まえると、一次関数と捉えられる二つの数量について、変化や対応の特徴などを見いだす指導を、一層充実させることが必要である。

5 「関数、図形」

二次関数 $y = ax^2$, $y = \frac{1}{8}x^2$ について出題した。与えられた条件をもとに、式、グラフを相互に関連付けて考察し、直線の式を求める中間1(2)の正答率が52.1%、面積を求める中間1(3)の正答率が24.4%となった。中間2(1)では、図形の相似条件を確かめることなどを通して、論理的に考察し表現する力を養う相似の証明問題を出題したが、正答率は30.4%と課題が見られた。

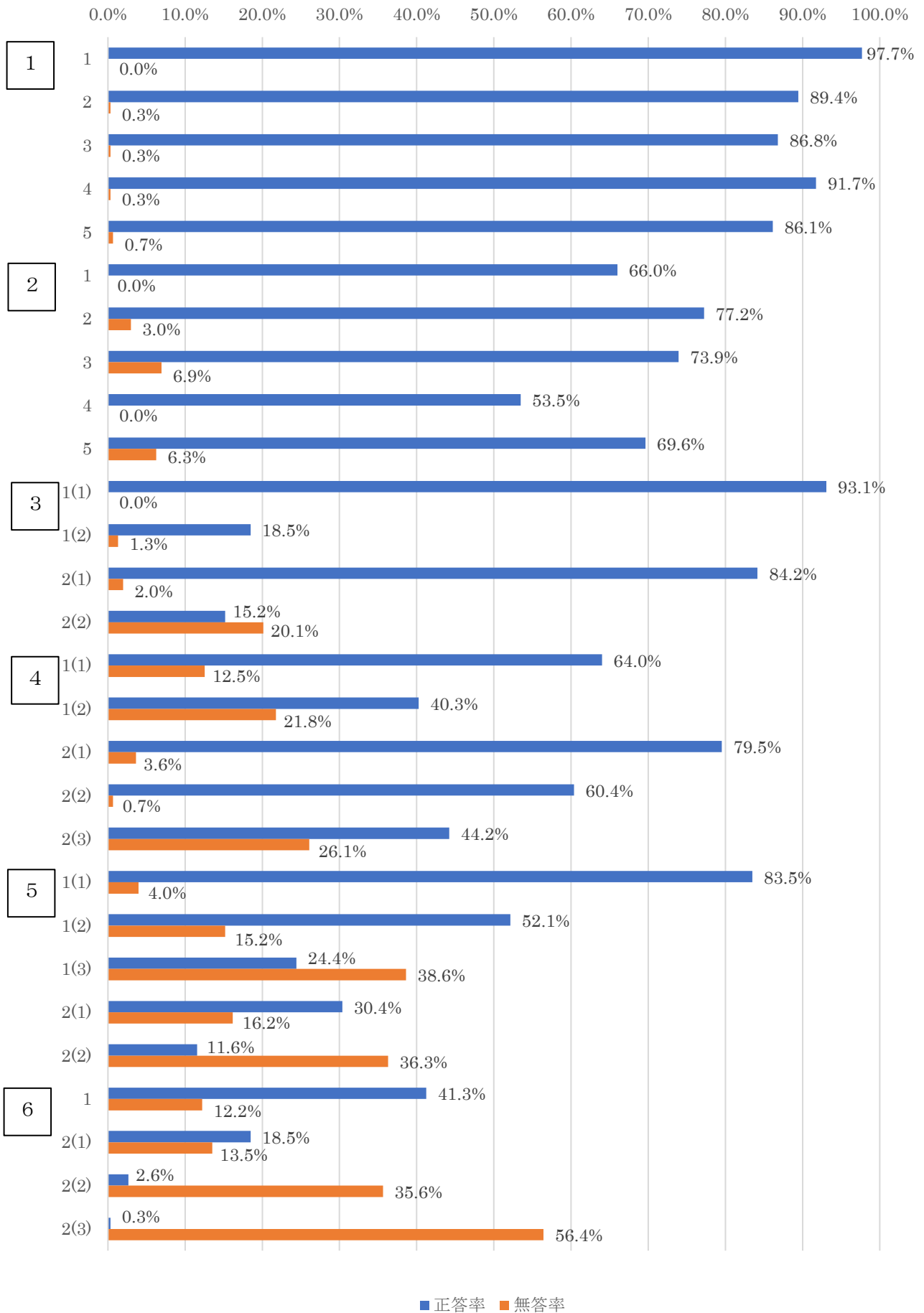
6 「図形」

中間1では、条件をもとに円柱の体積を文字で表す知識・技能を問う問題を出題したが、正答率は41.3%にとどまった。中間2(1)では、空間図形を平面に表現し、条件をもとに対角線ACの長さを求める問題は、正答率は18.5%であった。中間2(2)(3)では、平面に表現した図形を再度空間図形で考え、条件をもとに母線の長さや、線分AEの長さを求める問題を出題したが、正答率は(2)が2.6%、(3)が0.3%となった。観察や操作、実験などの活動を通して空間図形の理解を深める指導が大切である。

5 指導の改善の視点

大問1の正答率から、基礎的・基本的な知識や技能については、全体的には習得されていると考えられる。また、事象を数学化し、数学的に解釈し、数学的に表現・処理する力や、数量や図形などの性質を見いだし、統一的・発展的に考察し表現したり、問題解決に活用したりする力は今後も育成が必要であると考えられる。日常の授業において、「日常生活の事象」を教材化し、生徒が数学的に筋道立てて考察し、思考過程や根拠などを明らかにしながら論理的に説明し主体的に解決する学習や、関数や図形など、複数の領域にわたって総合的に考察し問題解決を通して豊かな数学的活動が展開されるよう、授業改善の推進が必要である。

7 令和8年度 正答率調査結果（数学）（調査対象：303人）



2 4 正答 53.5% 誤答率 46.5% 無答率 0%

4 関数 $y = -\frac{4}{x}$ について、 $x > 0$ の場合、 x の値が増加すると、 y の値の変化はどのようになるか、次のア～ウから1つ選び、その記号を書きなさい。

ア 増加する イ 減少する ウ 変化しない

比例定数が負である反比例を表す式から、 x の値が増加するとき、 y の値がどのようになるかを問う選択問題を出題した。正答率が低かった原因として、小学校段階の反比例の、 x の値が増加するとき、 y の値が減少するというイメージを持っている生徒が一定数いることが考えられる。反比例の変化や対応の特徴を考察し、比例定数が正の場合と負の場合の式と、それぞれのグラフの増減とを比較・検討するなどして、反比例の意味や特徴を理解させるような指導をすることが求められる。

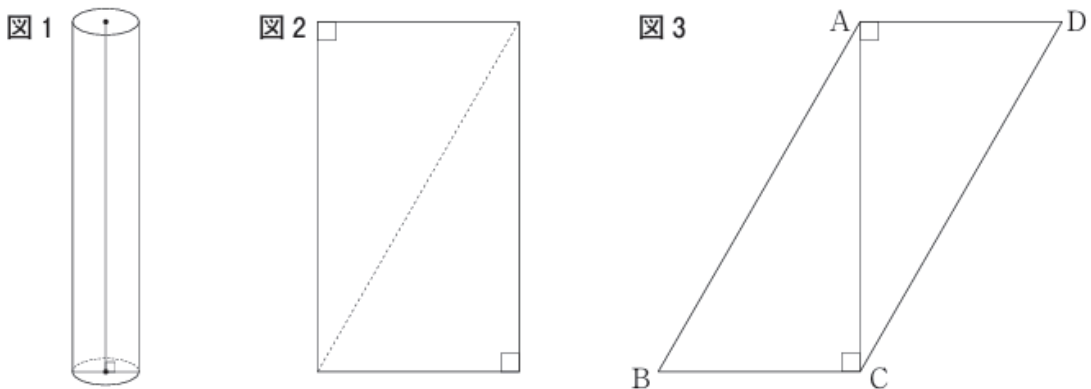
6 2 (1) 正答率 18.5% 誤答率 68.0% 無答率 13.5%

6 次の1, 2に答えなさい。ただし、円周率は π とする。

2 図1は、底面の直径が3 cm の円柱であり、図2は、図1の側面となる長方形である。図2を対角線で2つに分け、一方を平行移動させたところ、図3のような平行四辺形となった。

図3の平行四辺形ABCDにおいて、対角線ACの長さは図1の円柱の高さと等しい。また、 $\angle ACB = 90^\circ$ 、 $AB : BC = 2 : 1$ である。

このとき、次の(1)～(3)に答えなさい。



(1) 図3において、対角線ACの長さを求めなさい。

空間図形を平面に表現し、条件をもとに対角線 AC の長さを求める問題を出題した。正答率が低かった原因として、空間図形を平面に表現し、直角三角形を見いだせたものの、線分 BC の長さが底面の円周の長さに等しいことに気付くことができず、三平方の定理を活用することができなかつたと考えられる。立体図形の展開図を用いて筋道を立てて説明することを通して空間図形について理解することや、三平方の定理を空間でも用いることができることを丁寧に指導することが求められる。

○ 理 科

1 出題のねらい，配慮事項

中学校学習指導要領の趣旨に基づき，「自然の事物・現象に進んで関わり，理科の見方・考え方を働かせ，見通しをもって観察，実験を行う」ことに留意した。

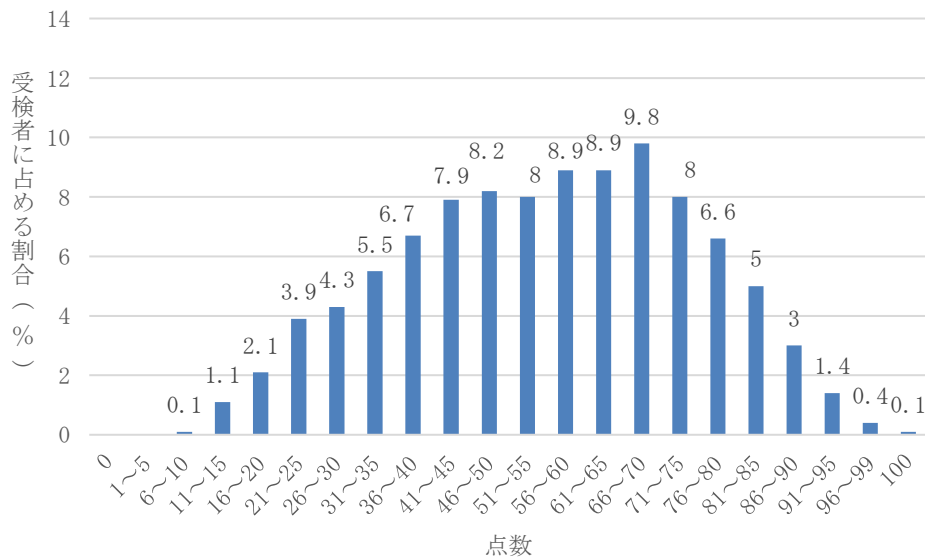
- ① 全学年にわたり，第1分野，第2分野の全領域から偏りのないように出題した。
- ② 観察，実験を重視し，自然の事物・現象を理解するための基礎的・基本的事項について検査できるようにした。
- ③ 問題解決の力や論理的な思考力が検査できるようにした。
- ④ 自然の事物・現象に関心を持ち，学習したことを基に考えようとする力を検査できるようにした。
- ⑤ 身近な材料を扱い，実社会・実生活との関連を実感できるようにした。

2 教科別 平均点，最高点，最低点（調査対象：3,009人）

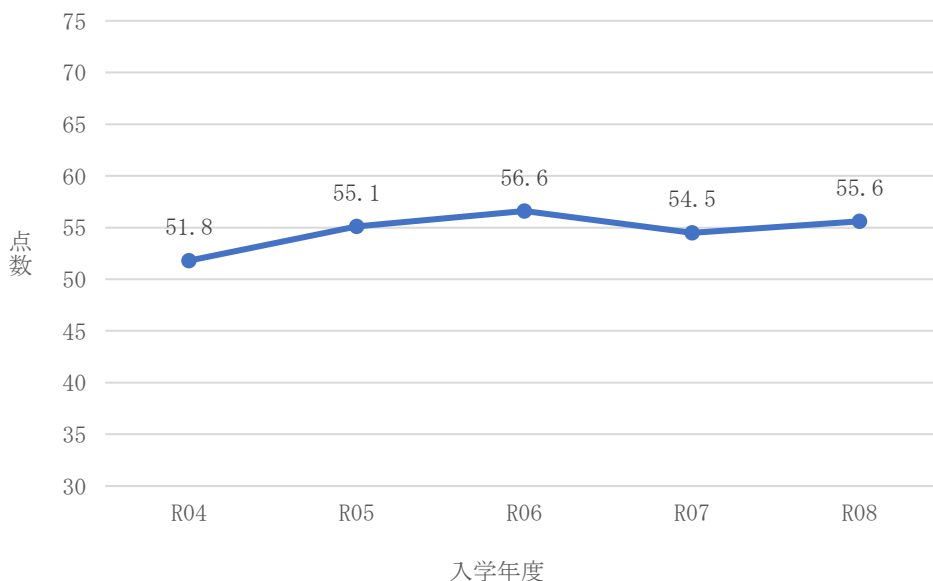
平均 55.6 点，最高点 100 点，最低点 8 点

3 理科の得点分布（調査対象：3,009人）

* 小数点第1位までを表示している。



4 平均点の推移（調査対象：各年度の5教科受検者全員）



5 大問別の内容と抽出調査・分析

1 「生物と細胞」

植物と動物の細胞とで共通、また異なるつくりがあることを見いだして理解するとともに、適切な観察器具の扱い方を身に付けているかを確認した。2 (1) では、顕微鏡を使って核を観察するために必要な染色法について、実験結果から判断できるかを確認したところ、正答率は63.4%となり、学習の定着が確認された。

2 「火山活動と火成岩」

観察をとおして、火成岩ごとの相違点から岩石を区別し、組織についてマグマの冷え方と関連付けて考察できる力を確認した。1 (3) では、観察した火成岩の様子から火山岩と深成岩を理解し、つくりの違いできる理由を確認したところ、正答率は77.6%となり、学習の定着が見られた。

3 「状態変化」

状態変化の前後の体積や質量を比べる実験をとおし、物質の体積は変化するが質量は変化しないことを理解しているかを確認した。3では、実験結果から密度を求めることができるかを確認したところ、正答率は5.3%となり、課題が残った。密度を考え際の質量と体積の関係を理解させることが必要である。

4 「運動の規則性」

小球の水平面上での運動についての実験をとおし、エネルギー保存の法則や慣性の法則を実験結果と結びつけて理解しているかを確認した。5では、力学的エネルギーの保存について確認したところ、正答率は9.2%となり、課題が残った。位置エネルギーと運動エネルギーを関連付けて理解させることが必要である。

5 「生物の種類の多様性と進化」

進化によって生物の多様性が生じたことを理解しているかを確認した。4では、脊椎動物の起源が同じ器官が生息環境の違いにより進化によって生じたことを与えられた語句を使って表現できるかを確認したところ、正答率は74.6%となり、学習の定着が見られた。

6 「太陽系と恒星」

金星および火星の運動について、観測資料を基に見かけの動きを理解しているかを確認した。4では、見かけの動きとそうに見える理由を確認したところ、正答率は32.0%となり、課題が残った。見かけの動きを地球の日周運動と関連付けて理解させることが必要である。

7 「化学変化」

実験をとおし、性質が異なる物質が生成されることを見だし、物質が結びつく際の質量の割合について理解しているかを確認した。3 (2) では、正答率が10.6%となり、課題が残った。質量の割合と質量保存の法則とを関連付けて理解することが必要である。

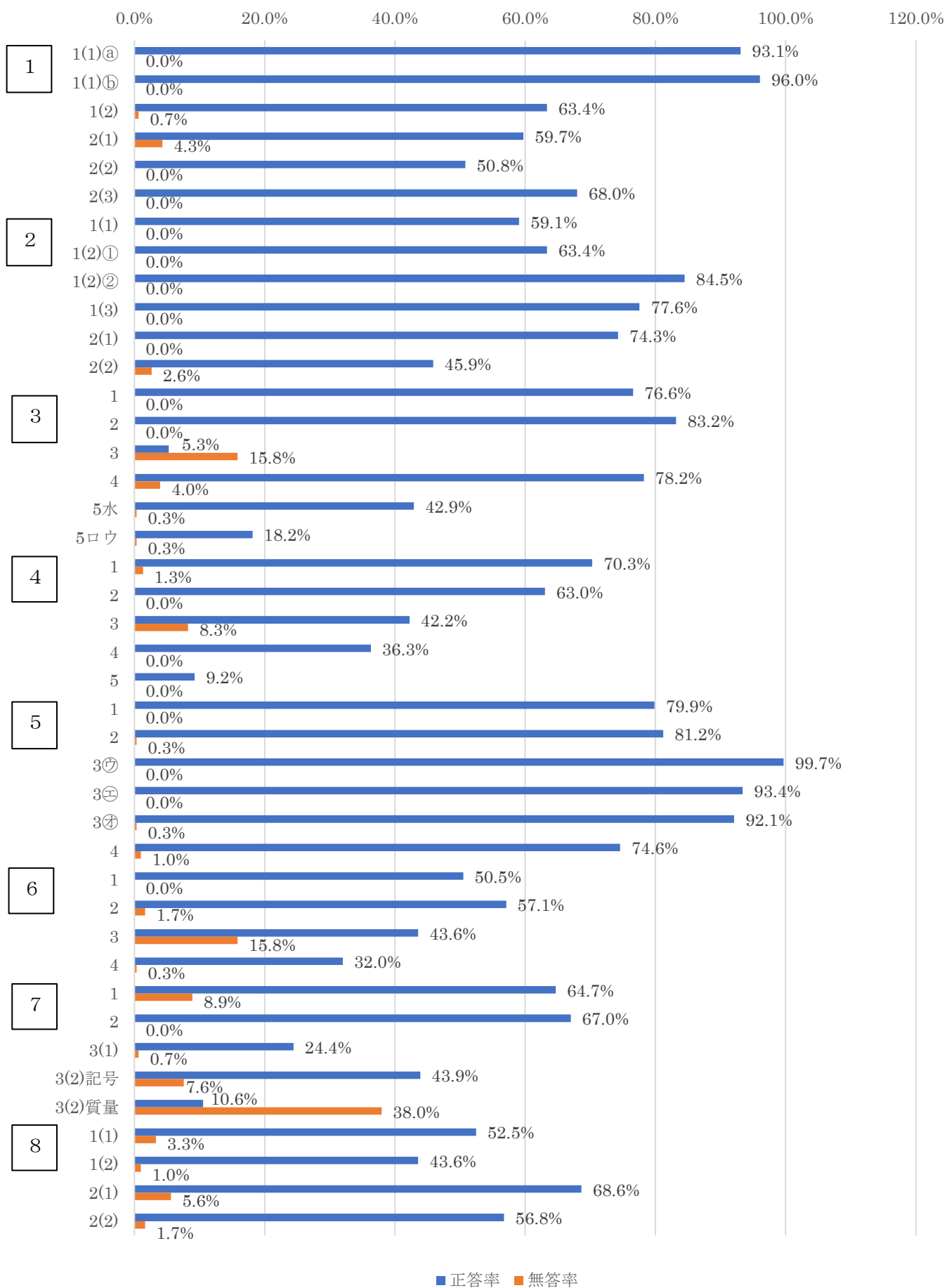
8 「光の反射・屈折」

実験をとおし、光の反射および屈折についての特徴について理解しているかを確認した。2 (1) では、水中から空気中に進む光の道筋を作図によって確認したところ、正答率は68.6%となり、学習の定着が見られた。

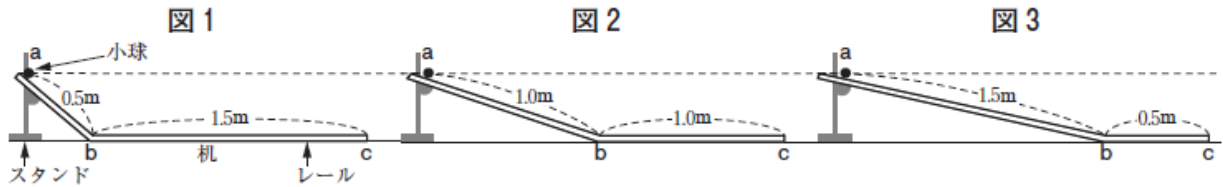
6 指導の改善の視点

顕微鏡の使い方や火成岩ごとの相違点など、知識や技能の定着を測る問題の正答率は良好であった。しかし、必要な情報を読み取り、学んだ知識を活用したり、法則性を見いだしたりするなど事象を分析することや知識と情報をつなぎ合わせることに課題が見られる。知識の定着のみならず、学習内容と日常生活との関連について理解を深めていくとともに、必要な情報を読み取り、分析力や思考力を育成することが必要である。

7 令和7年度 正答率調査結果（理科）（調査対象：303人）



- 4 図1～図3のように、斜面と水平面からなるレールを机の上に設置し、物体の運動について調べるための実験を行った。それぞれのレール上に小球を置いた点をa点とし、そこから静かに手をはなした。また、小球の運動を0.1秒の間隔で撮影し、ストロボ写真として記録した。小球の位置は、机からの高さがいずれも等しく、斜面（ab間）と水平面（bc間）の長さは、それぞれ図中に示したとおりである。1～5の問いに答えなさい。ただし、レールの斜面（ab間）と水平面（bc間）はなめらかに繋がっており、小球とレールの間の摩擦や空気の抵抗による影響は考えないものとする。



- 5 次の [] は、図1、図2、図3のレールでの実験の結果についてまとめた文章の一部である。文章中の [①] に当てはまるものを下のア～エから、 [②] に当てはまるものを下のオ～クから一つずつ選び、その記号をそれぞれ書きなさい。

小球のb点での瞬間の速さは [①] 。また、小球がa c間を移動するのにかかる時間は [②] 。

[①] に当てはまるもの

ア 図1のとき、一番大きい

イ 図2のとき、一番大きい

ウ 図3のとき、一番大きい

エ いずれの場合も、等しい

[②] に当てはまるもの

オ 図1のとき、一番短い

カ 図2のとき、一番短い

キ 図3のとき、一番短い

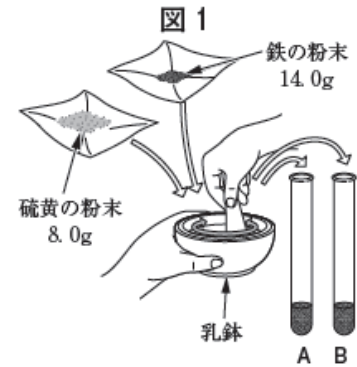
ク いずれの場合も、等しい

それぞれの傾斜を下った時の速さが力学的エネルギーの保存から等しくなることを導き出し、水平面上の移動も含め、もっとも時間がかからないものを選ぶ、思考力と判断力を問う出題とした。この問いでは、b点での速さが等しく、図中で最も速いことを理解し、最も速い状態での移動距離が長いほど時間が短くなることを、実際に実験をとおしてイメージをもたせた上で理解させることが必要である。

正答率 9.2% 無答率 0%

- 7 鉄と硫黄の化学変化について調べるために、次の実験を行った。1～3の問いに答えなさい。ただし、鉄と硫黄は、質量比7：4で過不足なく反応し、空気中の酸素とは反応しないものとする。

〔実験〕① 図1のように、鉄の粉末14.0gと硫黄の粉末8.0gを、乳鉢を使ってよく混ぜ合わせた。その混合物を、試験管Aと試験管Bにそれぞれ半分ずつ入れた。



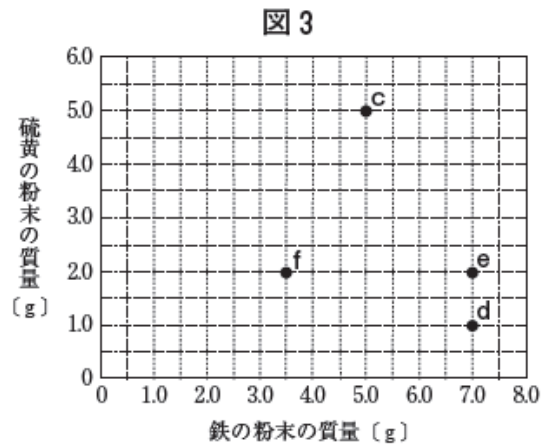
- ② 図2のように、試験管Bの口を脱脂綿でふさいでから、試験管の中の物質の上部をガスバーナーで加熱し、赤くなり始めたところで加熱をやめ、様子を観察した。
- ③ 試験管Bが室温まで冷めるまで待ったあと、試験管Aと試験管Bのそれぞれに磁石を近づけたときの様子を調べた。
- ④ 試験管Aと試験管Bの中に、うすい塩酸を2、3滴加え、発生した気体のにおいを調べた。

図2

- ⑤ ③と④の結果を下の表にまとめた。

- 3 鉄の粉末と硫黄の粉末の質量の組み合わせを変え、乳鉢でよく混ぜ合わせた混合物を入れた試験管C、D、E、Fを用意した。その後、試験管C～Fを使って〔実験〕の②、③の試験管Bと同様の操作を行った。

図3は、鉄の粉末と硫黄の粉末の質量の組み合わせを示したものであり、点cは試験管Cの中の粉末の質量を表している。同様に、点dは試験管Dを、点eは試験管Eを、点fは試験管Fを表している。(1)、(2)の問いに答えなさい。



- (2) 化学変化によってできた化合物の質量が最も大きくなった試験管はどれか、適当なものを、次のア～エから一つ選び、その記号を書きなさい。また、その試験管にできた化合物の質量は何gか、求めなさい。ただし、答えは小数第3位を四捨五入して、小数第2位まで書きなさい。

ア 試験管C イ 試験管D ウ 試験管E エ 試験管F

鉄と硫黄が7：4の質量比で化合することを把握した上で、それぞれ指定された質量で化合する質量と化合せずに残る質量を算出する、思考力と判断力を問う出題とした。実験では、完全に化合する質量の実験だけでなく、様々な質量で化合させる実験を行い、結果を比較させるなどの実験を行うことが必要である。

正答率 10.6% 無答率 38.0%

○ 英 語

1 出題のねらい，配慮事項

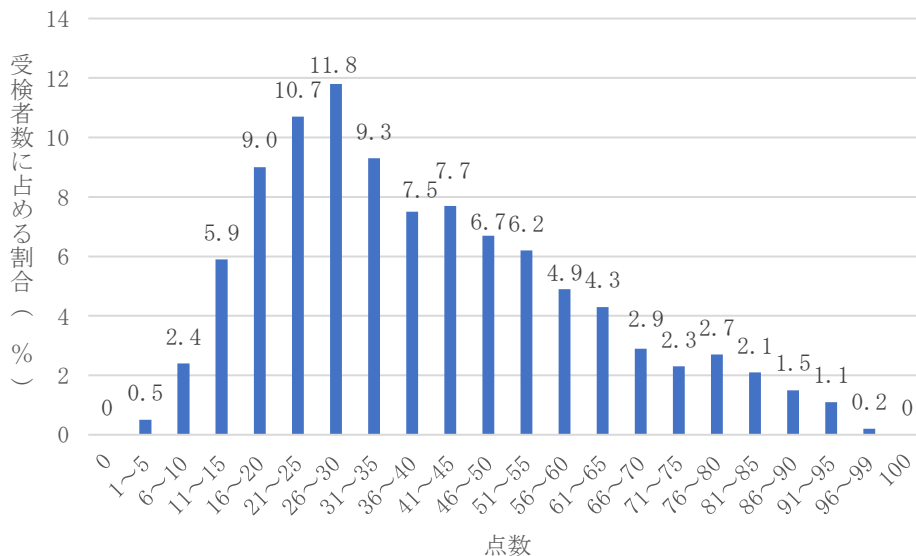
- ① 中学校の学習指導要領に示された外国語の目標及び内容に即して，基礎的・基本的な事項の理解度を評価できるように配慮し，「話すこと [やり取り・発表]」を念頭に，「聞くこと」「読むこと」「書くこと」の各領域にわたって総合的な英語の学力を検査できるようにした。
- ② リスニングテストの得点比重は従来どおり 30%とした。リスニングによる検査には，目的や場面，状況などを明確にした英文を聞いて，必要な情報を整理したり要点を捉えたりする問いを設けた。また今年度も，英語による音声の読み上げを1回のみとする問いを設けた。
- ③ 「読むこと」については，英語を理解する能力を検査するため，まとまりのある英文の概要や要旨を捉える力を検査できるように工夫した。また，「書くこと」については，文脈から判断して作文をする問いや，まとまった英文を指定された語数に従って書く問いを入れ，英語で表現する能力も検査できるようにした。

2 教科別 平均点，最高点，最低点（調査対象：3,009人）

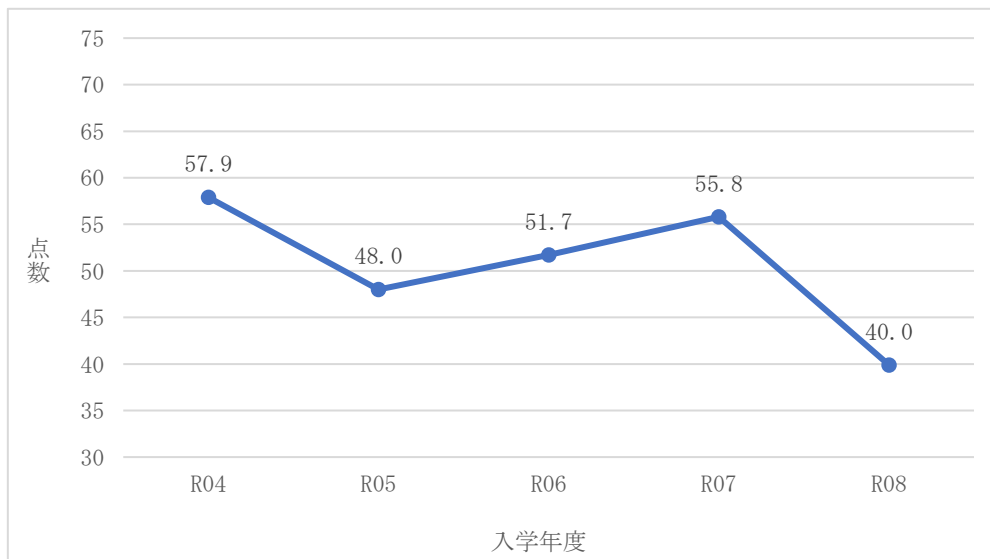
平均 40.0 点，最高点 100 点，最低点 3 点

3 英語の得点分布（調査対象：3,009人）

*小数点第1位までを表示している。



4 平均点の推移（調査対象：各年度の5教科受検者全員）



5 大問別の内容と抽出調査・分析

1 「聞くこと」に係る問題

様々な場面での短い会話を聞き、それに関する問いに答える問題である。文脈を適切に理解したうえで、各場面に関する問いについて適切な答えを導く力を検査した。全体の正答率は70%だったが、基礎的な知識・技能を問う問2の正答率は62%と低かった。聞き取った内容を正確に捉える力に課題が見られた。

2 「聞くこと」「書くこと」に係る問題

イングリッシュキャンプの担当者が生徒に指示している内容を聞き、それに関する問いに答える問題である。目的や場面、状況などを理解し、聞き取った内容の中から必要な情報を整理してメモの一部を完成させる問題と、担当者からの質問に対する自分の答えを選ぶ問題を設定した。メモの一部を完成させる問題の平均正答率が22.7%と低く、必要な情報を整理したり要点を捉えたりする力と英語を適切に書く力に課題が見られた。

3 「聞くこと」「読むこと」に係る問題

アメリカの国立公園の現地ガイドが生徒に説明している内容を聞き、それに関する問いの答えとして適切なものを選択肢から選ぶ問題である。英語で話された内容を適切に理解する実践的な力を検査できるよう、英語の読み上げ回数を例年と同様に1回とした。平均正答率は55%で昨年度を下回り、まとまりのある英文を1回で適切に聞き取る力に課題が見られた。

4 「読むこと」「書くこと」に係る問題

登場人物の中学生が、これから取り組む課題学習のためにクラスメイトとALTと対話し、山梨に住む外国の人々のためのガイドブックづくりに取り組むという内容の会話文である。英語を運用するうえで必要な基礎的な言語材料（語彙、文法等）の定着を見る問題や、文脈を把握したうえで既習の知識を活用して表現する問題の中に正答率が20%以下のものがあつた。また文脈にふさわしい英文を自分で考えて書く問題を昨年度と同様に2題としたが、平均正答率が12.6%と低く、既習の言語材料を用いて自分の言葉で表現する力に課題が見られた。

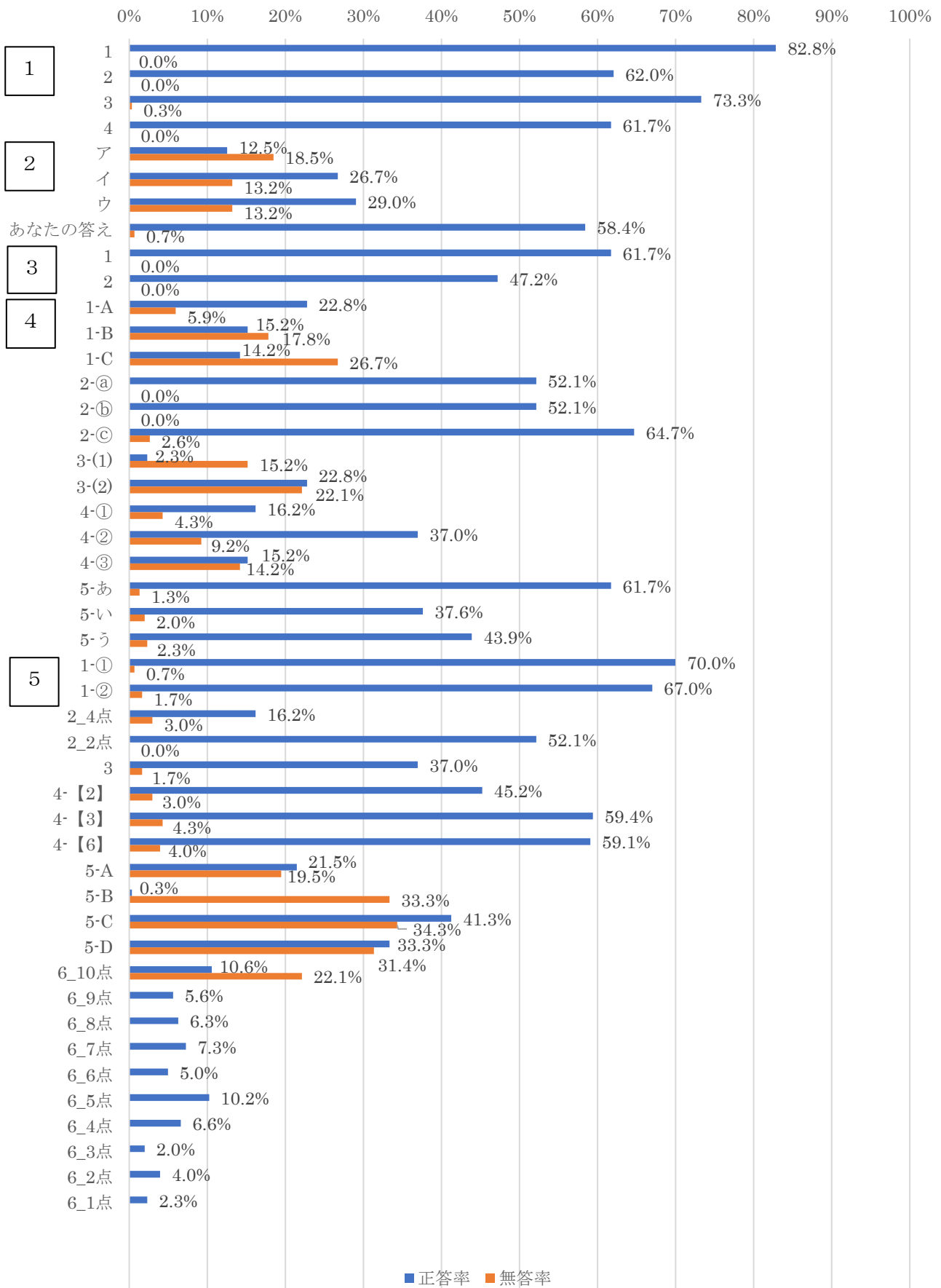
5 「読むこと」「書くこと」に係る問題

登場人物の高校生が、友人や地元の企業と協働し、持続可能な社会を作るために、廃棄されてしまう製品のアップサイクル（創造的な再利用）を実践していくという内容である。まとまりのある分量の英文を理解する力が求められているため、種々の観点から検査できるよう、内容に関する適切な答えの選択、文脈を踏まえた英文補充、各段落の内容に合う見出しの選択、本文の内容の要約の完成といった、多様な問題を設定した。要約の完成の平均正答率は24.1%と低く、まとまりのある英文の概要・要点の把握に課題が見られた。また、35語以上50語以内の英語で書くことを求めた問6では、35語以上の英語を書いた受検生の割合は63%と昨年度をやや下回り、満点であった受検生の割合は10.6%と低く、条件を満たした上でまとまった英文を書く力に課題が見られた。

6 指導の改善の視点

今回の検査においては、「聞くこと」では、聞いて得られた情報を基に判断し自分に必要な情報を導き出す力、「読むこと」では、概要を把握し、文脈を手がかりに問いに適確に答える力、「書くこと」では、文脈や与えられたテーマに対して適切に表現できる力が求められた。特に「聞くこと」の指導においては目的や場面、状況などを理解し、聞き取った内容の中から必要な情報を整理する力を高めることが重要である。「読むこと」の指導においては知識・技能に偏らないこと、また「話すこと」「書くこと」については、ある程度の正確さを伴った英語による発信力を高めることが重要になる。教科書を基にした日々の学習の中で、「聞く」「読む」といった活動に目的意識を持たせ、「話す」「書く」といった発信を意識した言語活動を多く行うことで、4技能の統合的な力を育成することが重要である。

7 令和8年度 正答率調査結果（英語）（調査対象：303人）



4 3 (2) 4点 : 22.8%, 3点 : 7.3%, 2点 : 5.9%, 1点 : 5.2%, 0点 : 58.7% (うち無答 : 22.1%)

(本文抜粋)

Hana: I see. I'd like to go to the Japanese language class again. I'll ask the foreign people there about their countries and their lives in Yamanashi.

Paulo: (2) (go / with)?

Hana: Of course, you can. There are some people from Brazil there, so you can help them.

(解答例)

Can I go with you?

この設問は、本文の会話が成り立つように、下線部(2)に、goとwith以外にいくつか不足している語を補って適当な英文を書くという問題である。日本語教室を訪れてそこにいる外国人の人に質問をしたいと話すHanaに対して、Pauloが何かを尋ねている場面である。その後でHanaが“Of course, you can.”と返答していることから、下線部(2)の疑問文としては、PauloがHanaに、自分も一緒に日本語教室を訪れてよいかどうかを尋ねるような内容の英文が入ることが分かる。そのため、解答例のように“Can I go with you?”(「私も一緒に行ってもいいですか。’)のような文が適当な英文となる

昨年度に引き続き、会話の流れから判断し、自分で適当な英文を思考して作り、適切に表現する形式の問題を出題した。文法など基本的な言語材料においては、その形式だけでなく、意味と内容をもった実際の言葉として、どのような場面でどのように用いられるのかについてもあわせて学習することが大切である。日頃から、教師やALTと生徒との間で、自然なやり取りを授業に取り入れ、英語による発信力を向上させることが大切である。

5 5 正答率 A : 21.5%, B : 0.3%, C : 41.3%, D : 33.3%
無答率 A : 19.5%, B : 33.3%, C : 34.3%, D : 31.4%

(問題抜粋)

Thank you for your great speech. Like you, I also think that we often throw away things which we can still (A). By upcycling, we can continue using them for a long time (B) of throwing them away. Now I understand that turning (C) things into new and better things can help the environment. I can't wait to see and buy one of your bags which are (D) against rain. I want to try upcycling with things that I no longer need.

この設問は、本文の内容に基づいて文章を完成させる問題である。Rikuがアップサイクルに取り組んだ内容に注目し、時間的な経過をふまえながら解答するとよい。Aではゴミが増える原因について、Bではアップサイクルによって得られるメリットについて、Cではアップサイクルの意味について、DではRikuが制作しようとしているバッグの長所について注目すれば解答を導くことができる。

日頃の授業では、読み取った教科書の内容確認に留まらず、読み取った内容を、聞き手や読み手を変えて伝えたり、異なる視点から書かれた内容を読み比べたりする活動を随時取り入れていくことが大切である。

